

有島武郎の童話における創作態度

——翻案童話「燕と王子」の成立をめぐって——

芦 野 陽 子

はじめに

有島武郎作「燕と王子」はオズカー・ワイルドの「幸福な王子」を翻案した作品である。「燕と王子」の梗概は、エジプトからやって来た燕が、小さな町で美しい王子の像と出会う。貧しい町で起こる不幸を悲しむ王子は、自ら体に施された金箔や宝石を届けるように燕に頼み、遂に見るも無惨な姿となってしまう。燕は王子と最期まで一緒にいることを望むが、王子に促され、再会の約束と共に帰る。取り残された王子の像は、その醜さから町の人々によつて壊されるが、寺の鐘として生まれ変わる。翌年、町に戻ってきた燕は王子と再会できなかったが、今でも寺の鐘は町中に美しい音色を響かせている、と結ばれる。

「燕と王子」の大まかな構成は原作に沿っているが、王子の頼み

や結末は変更されており、先行研究においてもその変更点は指摘されている。一九六八年に、山田昭夫氏は「原作よりも子供の心に受け入れやすく翻案されているといえる。重要な改変としては、有島のキリスト受容、キリスト教否認の心情の反映を指摘できる。」と述べている。一九八五年に鈴木幸枝子氏も執筆時期に有島がキリスト教に疑念を抱いていたことを強調したうえで、「燕と王子」は、外面つまり設定、構成は原作を忠実に踏襲しているにもかかわらず、主題の解釈は別、いわゆる本質の部分に異質性を持った翻案作品といわねばならない」と述べている。また、二〇〇四年に増満圭子氏は原作を具体的に比較し、各変更点で当時の有島の児童観を考察している。^③二〇二〇年に宮本祐司氏も原作との比較を行ったうえで、有島とワイルドの死生観の違いを述べる。^④

このように本作品の研究は原作との比較を中心に進められてきた。

有島は病気の甥に見舞いとして本作品を執筆し、自ら挿絵を施した自筆原稿を贈った。そして有島没後に公表された。その特殊な成立事情から、晩年の創作童話と比べ、研究はあまり進んでいない。原作との比較も重要であるが、本作品が不特定多数の読者を前提として書かれていない点は、重要な研究課題であると考ええる。

まず、先行研究における初出誌の誤りを訂正し、書誌的事項を確認する。またタイトルの発案者を探索し、そこに有島の意思が反映されているのかを考察する。そして、燕と王子が出会うまでの冒頭部分の変更をめぐつて、大衆向けに発表された原作と比較し、有島の意図を考察する。本論を通して、本作品は有島が読者の甥に寄り添って生み出されたもので、この執筆態度が後の童話にも寄与していることを明らかにしたい。

一 書誌情報の訂正と再考

「燕と王子」は、有島が病気の甥山本直正のために、オスカー・ワイルドの「幸福な王子」を翻案し、自ら描いた挿絵を付した自筆原稿を贈り、有島の死後に公表されたという特殊な成立事情を有する。従来、初出は新潮社から発行された雑誌『婦人の国』とされてきた。そこには、有島武郎の遺筆童話として自筆原稿の複写と、山本直正による小序が掲載されている。『婦人の国』第一巻第一号〈

第三号は一九二五（大正一四）年五、六、七月発行が正しい。しかし、研究者によって主張が異なる。鈴木幸枝子「有島武郎・翻案童話「燕と王子」についての一考察——オスカー・ワイルドとの関係について」では、初出誌をめぐる研究史に触れており、

昭和四十八年になって山田昭夫氏が「翻案童話『燕と王子』覚書」の中で、初出の発表誌は大正十四年七、八月号「婦人の国」（新潮社）であること、そして童話を贈られた甥、山本道正が有島の死後、自分の小序をつけて掲載した旨を発表したことによって、初めてその全容が明らかになったわけである。ただ初出誌に関しては、既にその前年、増田正一氏が指摘しており、山田氏が（中略）あたかも先の論文で始めて指摘した如く書いていること、更に福田清人氏が「燕と王子」の初出誌指摘は山田氏の論文が最初であることは明らかに誤りである。発表時を大正十四年七、八月号としたのも間違いで、正確には、大正十四年五、六、七月号である。発表時に関しては先の増田氏の論文においても大正十五年四月掲載と、誤りが記されている。^⑤

と述べる。この論文で触れられている先行研究の書誌情報や研究者の名前には誤りが見られるため、該当すると考えられる先行研究を調べた。確かに鈴木氏の述べる旨が記されていたが、福田清人「有

島武郎の童話」においては次のように記されている。

有島はすでに、札幌の農科大学の英語教師勤めの明治四十一年、二年、三十一、二歳の頃、病床にあった幼い甥を慰めるために、オスカ・ワイルドの「幸福な王子」の翻案「燕と王子」を見舞状に同封して送った。(山田昭夫氏『翻案童話「燕と王子」覚書』集英社版「日本文学全集35有島武郎月報」昭和四八・四に、この作品の発表誌が長く不詳であったが、新潮社の雑誌「婦人の国」大正十四年七・八月に遺稿としてこの作を与えられた有島の妹愛子の長男山本直正の小序を付し発表されたことや、有島の挿絵入りの直筆そのまま載っていること、小序の記憶がいの誤記も正して紹介している。)^⑦

福田氏の記述からは、鈴木氏が指摘する「初出誌指摘は山田氏の論文が最初であるとしている」箇所は見当たらなかった。

また、一九七八年五月に出版された佐々木靖章編『資料有島武郎著作目録・著作解題』では、正しい掲載時期を記載したうえで、解題には「初出不詳であったが山田昭夫により明かにされた。但し山田年譜は掲載時が不正確。(中略)山田『有島武郎』参照^⑧』と述べる。「山田『有島武郎』参照」は「死後発表された「燕と王子」(大正15・4『婦人の国』)である。」を指しているだろう。鈴木氏は初出誌指摘を山田氏が最初ではないとしていたが、山田氏の『有島武

郎』の出版は一九六六年一月であるため、鈴木氏の誤りであり、山田氏が初出誌を最初に指摘したと考える。さらに鈴木氏の論文以降で初出誌の指摘を調べると、最新のものは二〇一〇年一月に出版された『有島武郎事典』で、増満圭子氏が「燕と王子」の項目を執筆しているが、『婦人の国』の発行は「一九二六年(大正一五)・四」^⑩としている。

これまで挙げた研究者の主張を整理すると、一九六六年に山田氏は初めて『婦人の国』の発行時期について大正一五年四月と指摘した。それを増子氏(一九七二年)と増満氏(二〇一〇年)が引用している。さらに一九六八年に山田氏は大正一四年七、八月に変更している。これを福田氏(一九八一年)が引用する。しかし正しい発行時期は大正一四年五、六、七月で、佐々木氏(一九七八年)、安川氏(一九八一年)、鈴木氏(一九八五年)はこれを記していた。

以上のように従来の研究では、『婦人の国』が初出とされてきた。しかし、それ以前に「燕と王子」のテクストは世に出ている。一九二四(大正一三)年一〇月に叢文閣から出版された『有島武郎全集』第八巻に、「燕と王子(翻案)」として掲載されているのである。本稿ではこの叢文閣版の全集を初出としたい。この二つの本文に大きな異同はないが、全集では自筆原稿の誤字を訂正し、自筆原稿にはない句読点を補っている。また、「エヂプト」や「ナイル」など

固有名詞に施されていた傍線が消去されている。

全集の出版と『婦人の国』の間には約一年の空白がある。なぜ先行研究では『婦人の国』を初出としているのか。『婦人の国』の発行が遅れたために、全集よりも後になった可能性は考えられるが、その旨が記された文献は見当たらない。現時点では、先行研究の書誌情報が不統一で、本作品自体が研究されてこなかったことから、全集が『婦人の国』より前に出版されていたことを研究者が見落としていたと考える。『婦人の国』は原稿の持ち主が寄稿し、それを誌上で遺稿と掲げる。さらに自筆原稿の複写を載せた点でも文献として価値が高く、研究者は初出と信じ切っていたと推測される。また『婦人の国』の編集者は全集に「燕と王子」が掲載されていることを知っていたため、あえて初出とせずに遺稿と銘打った可能性も考えられる。最初に初出を明らかにした山田氏の論文は、『婦人の国』や全集の出版から四〇年ほど経過している。叢文閣版全集の編集に携わっていない山田氏は、全集に収録されていることに気付かなかったのかもしれない。ただし、鈴木氏の論文から叢文閣版『有島武郎全集』第四巻に目を通したと窺える記述があるが、初出は『婦人の国』としている。第八巻の確認漏れの可能性も否めないが、『婦人の国』と全集の出版状況についてはまだ研究の余地があるだろう。

また全集における「燕と王子」の底本だが、解題がないため明確には分からない。ただし全集第一巻の巻末には「故人の書簡及び筆跡等を御貸与下されし方々にも茲に御礼申上ます」と記されている^⑪。関係者として山本直正が、全集編集者に原稿を渡したと考えて齟齬はないだろう^⑫。

次に、タイトルについて述べたい。現在は「燕と王子」が一般的であるが、タイトルも書籍や研究者によって異なり、「燕と王子」の他にも「つばめと王子」が見られる。

「つばめと王子」という表記は増満圭子氏が使用している。増満氏は前述の『有島武郎事典』における本作品の項目を担当したほか、「翻案童話「つばめと王子」に見られる有島武郎の子供観——原作オスカー・ワイルド「幸福な王子」との異同を中心に——」（『有島武郎研究』第七巻、二〇〇四年三月）も執筆している。どちらも「つばめと王子」であるが、作品内では「燕」と表記されていること、叢文閣版全集や『婦人の国』、山本直正が「燕と王子」としていることから、「燕と王子」が正しいと考える。

しかし、「燕と王子」というタイトルを有島武郎が発案した証拠はない。『婦人の国』の自筆原稿にはタイトルが書かれておらず、本文から始まっている。自筆原稿の前頁は燕の絵が描かれた表紙に

タイトルと山本直正による小序がある。表紙の絵は隅に「Masuo」^⑧というサインがあり、有島自身が描いていない。つまり有島自身がタイトルを書いた痕跡がないのである。

有島以外の誰かを発案者として考えるなら、山本直正が挙げられよう。小序では作品が贈られた経緯について、次のように述べる。

この「燕と王子」というお伽噺は、まだ私が小学校へ入学したばかりの頃、そうです明治三十八九年でしたが、(中略)伯父様が以前読まれたお伽噺を思ひ出したからと云つて、自ら挿絵までして病氣見舞の手紙へ入れて送つて下さつたものです。当時伯父様は二十七八歳で、農科大学の助教授として札幌に仮寓してゐられたのです。

山本直正は明治三八、九年に贈られたと述べているが、当時有島は留学中であり、誤りである。有島は明治三十六年八月に渡米、明治四〇年一月に渡欧、二月に帰国し、四一年一月に札幌に赴任、六月に大学予備科教授に就任していることから、明治四一年頃に執筆したと考える。また、ワイルドの「幸福な王子」を最初に翻訳したのは田波御白で、「皇子と燕」として明治四三年六月、『東亞之光』第五卷第六号に発表された。つまり執筆当時、有島は翻訳を読んでいない。留学中に原作と出会い、明治四一年頃に独自に英語の原作から翻案したのである。しかし、「燕と王子」と「皇子と燕」というた

イトルは類似している。もし有島がタイトルをつけずに贈ったのであれば、山本直正は田波御白の翻訳を読み、そこから「燕と王子」というタイトルをつけた可能性も考えられる。

もつともこの推定の根拠は不十分であるため、現段階ではタイトルの発案者が必ずしも有島ではない可能性はあるが、有島の意思が反映されていると考えている。「幸福な王子」は田波御白以後、数多く翻訳がなされたが、タイトルに関しては、田波御白の「皇子と燕」を継承、もしくは原題を直訳しているものどちらかである。「幸福な王子」の冒頭は王子の像が丘の上に立っているという描写だが、「燕と王子」は燕の描写から始まり、燕を追って物語が展開する。有島が原作よりも燕の存在に比重を置いているのは明らかであり、タイトルにもそれを表したかったのではないだろうか。

二 冒頭における、原作との比較

比較するにあたり、「燕と王子」は『有島武郎全集』第六卷(一九一一年二月、筑摩書房)と初版の原文(Oscar Wilde, *The Happy Prince and Other Tales*, London, May 1888)を使用した。また本論における「幸福な王子」の引用は、田波御白訳の「皇子と燕」に拠り、後注に該当する英文を記す。

まず、「燕と王子」の冒頭は次の通りである。

燕と云ふ鳥は所をさだめず飛びまはる鳥で暖い所を見付けてお引越を致します。今は日本が暖いからおもてに出て御覧なさい。羽根が紫の様な黒でお腹が白で喉の処に赤い頸巻をしておとく様の御召しになる燕尾服の後部見た様な尾のある雀より余程大きな鳥が眼まぐるしい程活潑に飛び廻つて居ます。此お話は其燕のお話です。

燕の沢山住んで居るのはエチプトのナイルといふ世界中で一番大きな川の岸です——おかア様に地図を見せておもらひなさい——其処は始終暖かですよいのですけれども燕も時々はあきると見えて群れを作つて引越しをします。

燕の生態の説明から始まり、「此お話は其燕のお話です」と話題を提示する。また燕の説明の途中で、「今は日本が暖いからおもてに出て御覧なさい」、「おとう様の御召しになる燕尾服の後部見た様な」、「おかア様に地図を見せておもらひなさい」といった、まるで有島が甥に語りかけるような表現が見られる。原作は、「高い台の上に、全市を見おろして、幸福皇子の像が立つてゐた」と始まり、語り手が読者を意識した語りではない。冒頭に王子の像の存在を明らかにし、銅像をめぐる民衆たちのやりとりへ繋がっていく。山本直正は小序で、小学校へ入学したばかりの頃に作品が贈られたと述べ、「私共兄弟は母の膝にまつわりながら、度々このお伽噺

を読んで聞かされたのを覚えてゐます」と想起する。有島は甥に読まれる際、母親が読み聞かせることを想定していたのではないだろうか。後年、「書後『芸術と生活』跋」(『有島武郎著作集』第五輯、大正十一年九月)において、有島は次のように述べる。

それから私は「一房の葡萄」といふ童話の本を出した。童話については、私は或る主張を持つてゐて、その主張によつてあの四つのお話を書いて見た。大人が子供に読んで聞かせるやうにすると、一番子供にはよく訴へるやうだといふ人が多い。若しあの本を顧みて下さる読者があつたら、さういふ試みがしてほしい。

有島は、母親が童話を読み聞かせることを理想としていた。「燕と王子」を含め、有島の童話のうち、約半分が婦人雑誌に掲載されているのは、この理想が少なからず反映されているだろう。甥が家族に囲まれて作品を享受する場で、語り手として有島の存在を仄めかしながら、あえて家族と交流する契機を作り、より楽しい環境で作品が読まれることを期待したのではないだろうか。この場面以降、語り手に有島の存在が見出されることはない。この始まりは、家族との交流による楽しい環境が病気の甥を辛い現実から切り離し、現実と作品世界を行き来して、やがて楽しい環境から作品世界へ切り替える効果をもつといえる。

次に、大きく異なるのは王子の描写である。原作では冒頭から王子を「幸福皇子 (the Happy Prince)」と呼んでいるが、「燕と王子」では作品全体を通して、「幸福」という修飾はされていない。

原作で王子は生前について、次のように言う。

私がまだ生活いきてゐた人間の心をもつてゐた時に、涙と云ふものはどんなものだか知らなかつた私は Sanssouci の宮殿にすんでゐた、そこには悲哀なんと云ふものは這入ることはできなかつた。(中略)庭の周囲には高い塀がめぐらしてあつたが、私はその塀の外にどんなものがあるのかたづねて見ようともしはなかつた、(中略)宮中の人々は私を幸福皇子マツと呼んでゐた、それでもしも快樂が幸福であるとするならば、私はたしかに幸福であつた、そんなにして生きて、そんなにして死んだ、私が死ぬと人達は私を、この町のすべてのきたないものと、あはれなものを見ることのできるやうな、こんな、高いところに私を載せた、そして私の心は鉛でつくられてゐるけれども、泣くより外に道はない¹⁶

王子は生前、物質的に恵まれて幸福だったが、像として貧しく暮らす民衆を見て、涙を流すほど悲しい思いをしていることが読み取れる。生前から自己犠牲的な精神を持ち合わせていたのではなく、宮殿の外で「この町のすべてのきたないものと、あはれなもの」と

見て、考えを改めたのである。さらに読み込むと、高い塀に囲まれ、悲哀が入り込まない宮殿で、民衆の貧しさに無関心だった王子には、産業革命で国が豊かになる一方で貧富の差が広がり、上流階級の人々が下層階級に無関心であるイギリスの社会情勢を投影しているように思われる。そのような社会を死後に認識して悲しむ王子に、民衆や語り手が「幸福」と形容するのは、物質的な観点で幸福とする、一義的な考えを持つ王子や民衆を揶揄しているといえる。「燕と王子」はそのようなややこしい揶揄は子どもである甥には不要として削除し、単純明快になつている。

大変心のやさしい王子であつたのがまだ年の若い中に病気で崩なられたので王様と皇后が大層悲しまれて青銅の上に金の延板をかぶせて其立像を造り記念の為に町の目貫の処にそれをお立てになつたのでした。

この部分は、裕福な環境で家族に愛され育てられたが、病氣という非情な運命に遭つた可哀相な王子が、語り手によって説明される。宮殿の外の世界には無関心で、ただ物質的な快樂を享受してばかりだった「幸福皇子」とは対照的である。

また「燕と王子」が単純明快である点は、原作の像をめぐる民衆のやりとりを削除したことも当てはまる。そのやりとりには皮肉めいた様相が見られる。例えば、町の議員の一人は美術趣味があると

評判を得たい一方で、非実用的な人物とは思われたくないという矛盾した考えを持っている。そしてその議員は、王子の像を風見鶏のように美しいと評するが、役に立たないものとして見る。月を欲しがって泣く子どもの母親は、物質的に恵まれた王子が何かを求めて泣かないと言って、子どもをなだめる。失望している男は物に過ぎない王子の像を見て、この世に幸福な人がいると嬉しいと呟く。王子の像を天使のように思う子ども達と、子どもが夢を見ることをよしとせず、天使の存在を否定して現実にしか目を向けない数学の先生。議員の持つ矛盾した考え、世間体を意識して実用的な人物として取り繕う姿、親子や男が貧しさや悲しみを民衆に無関心だった王子の像で慰める様子、夢見がちな子どもと現実主義の大人の対比など、執筆当時の社会に対するワイルドなりの皮肉と捉えられる。有島はこのような大人が作り上げた社会の不条理は子どもには不要と判断し、削除したのではないだろうか。

有島は童話を執筆する際に、子どもの立場に立つことを意識していた。一九二一年六月九日の古川光太郎宛の手紙には、「私の立場はいつでも子供の立場から子供の心理を書くといふのにありました」と記す。有島の童話といえば、まず「一房の葡萄」が挙げられるが、その創作動機も「童話について（合評）」（『著作評論』大正九年七月）の、生田長江、大庭柯公、堺利彦、長谷川是如閑、馬場

孤蝶との座談会で話している。有島は「今までの童話には子供に読まずものとしては子供の心持を標準として書いたものがない様に思へたので書き始め」、「大人のする事でどうしても子供時代の私の心持ちにそぐはない」時の「同情者」になりたかったと述べる。有島は大人の世界とは別の子どもの世界に身を置き、子どもの心持ちに即した童話を書こうとしたのである。読者の存在を第一に考える童話作家といえるだろう。

後に有島は童話集『一房の葡萄』（一九二二年六月、叢文閣）を出版するが、そこに「燕と王子」は収録されていない。有島自身が「燕と王子」についての記述を残していないため、憶測の域を出ないが、理由は二つ考えられる。まず自筆原稿を甥に送り、原稿自体が手元になかったため、収録できなかった。または『一房の葡萄』は息子への献辞が書かれていることから、息子に宛てて出版された。息子宛ての童話集に、甥のために創作した「燕と王子」を収めるのは、有島自身が許さなかった。「燕と王子」が甥に寄り添って書かれた点や『一房の葡萄』が息子に宛てたものであった点を踏まえると、前者も考えられるが、誰に向けた作品であるのかを重視した有島が故意に収録しなかったこともあり得る。「燕と王子」で強く読者を意識した執筆態度は、童話作家として童話を出版した晩年にも継続されているといえよう。

以上のように「幸福な王子」と「燕と王子」の王子の描写は大きな差異がある。「幸福な王子」の、高い塀に囲まれた宮殿で外の世界を知ろうともしない無関心な姿勢は、当時の上流階級の人々が投影されていると考える。一方で「燕と王子」は、「幸福な王子」に「潜む揶揄や矛盾を排除し、悲運に見舞われた可哀相な王子が、貧しさに苦しむ民衆を見て、自ら行動を起こして助けようとする。この姿は生前と同じ「大変心のやさしい王子」であり、子どもが抱く王子の理想像ではないだろうか。また、涙を流さず「やさしいにこやかな笑み」を浮かべながら民衆を見ている様子も、有島が甥を意識し、子どもが抱く王子の理想像を壊さないようにしているのではないだろうか。

おわりに

本作品の書誌研究は粗雑で、初出とされてきた『婦人の国』の発行年月を誤って記した研究者が多かったが、初出は新たに叢文閣版『有島武郎全集』と提示したい。タイトルの表記も不統一で、「燕と王子」が正確であるとした。しかしタイトル自体が有島によってつけられていない可能性もある。原作の邦題が直訳もしくは最初に翻訳した田波御白を継承しているもののみであるため、現時点では、有島の意思が反映されているものとするが、まだ考察の余地はある。

有島武郎の童話における創作態度

原作との比較を通して、話の骨格は原作に準拠しているが、有島は読者である甥を強く意識した改変をしている。甥が母親から読み聞かせられる環境にいること、病気であること、子どもであることが踏まえ、分かりやすく、親しみやすくなるようにしていることが特徴である。本論では述べなかったが、有島を彷彿とさせる画家を登場させたうえ、燕が生き残るといふ救いのある結末にも、甥を意識した改変がなされていると考えられる。

有島の童話は晩年に書かれたものばかりで、母親を亡くした息子達へ向けられた。有島の生涯における唯一の創作集、『一房の葡萄』には息子達への献辞を書き、自ら挿絵を施し、装丁しているほどの力作である。この童話集の中に甥に贈った作品である「燕と王子」が含まれなかったのも、有島の強く読者を意識した表れではないだろうか。童話作家としての有島武郎は、読者である子どもと対等な目線を持った作家であるだろう。

「燕と王子」の研究は進んでおらず、例えばまだ翻訳もされていない原作を翻案したという点など説明されていないことが多い。正確な書誌をふまえたうえで、さらなる研究を進めたい。

注

- ① 山田昭夫「翻案童話『燕と王子』覚書」(『日本文学全集25 有島武郎集 月報』四頁、一九六八年四月、集英社)
- ② 鈴木幸枝子「有島武郎・翻案童話『燕と王子』についての一考察——オスカー・ワイルドとの関係について」(『実践国文学』第二八号、一〇一頁、一九八五年一〇月)
- ③ 増満圭子「翻案童話『つばめと王子』に見られる有島武郎の子供観——原作オスカー・ワイルド『幸福な王子』との異同を中心に——」(『有島武郎研究』第七卷、二〇〇四年三月、有島武郎研究会)
- ④ 宮本祐司「原作童話と翻案童話における死生観の違い——オスカー・ワイルドと有島武郎の作品を中心として」(『キリスト教文学研究』第三七号、二〇二〇年四月)
- ⑤ 鈴木幸枝子「有島武郎・翻案童話『燕と王子』についての一考察——オスカー・ワイルドとの関係について」(『実践国文学』第二八号、九四頁〜九五頁、一九八五年一〇月) 当引用において、鈴木氏は甥を「山本道正」と記しているが、正しくは山本直正である。また、『婦人の国』の発行時期を正確に記載している文献について、注釈で「山田昭夫氏『有島武郎全集』第六卷・解説(筑摩書房 昭56・2)では提正、正しい初出誌年月を記載」と記している。しかし、全集で解説を執筆していたのは山田氏ではなく、安川定男氏である。
- ⑥ 鈴木氏の誤りについて(鈴木氏の記述↓訂正)
- ・ 山田昭夫氏の「翻案童話『燕と王子』覚書」
 - 「日本文学全集」(集英社) 月報35 ↓『日本文学全集25 有島武郎集 月報』(集英社、一九六八年)
- この誤りは福田清人氏の「有島武郎の童話」にも見られるため、鈴木氏はこの情報をそのまま引用したと推測する。
- ・ 増田正一「有島武郎の児童文学」(『児童文学』昭47・10) ↓増子正一「有島武郎の児童文学——童話成立過程とその前後・その二」(『日本文学学会』『児童文学研究』二号、一九七二年四月)
- ・ 福田氏の「有島武郎の童話」
- 「有島武郎全集」(筑摩書房) 月報8 昭52・2 ↓『有島武郎全集第六卷 月報八』(筑摩書房、一九八一年二月)
 - 福田清人「有島武郎の童話」(『有島武郎全集』第六卷 月報8、二頁、一九八一年二月、筑摩書房)
 - ⑧ 佐々木靖章編『資料有島武郎著作目録・著作解題』第二部・有島武郎著作解題、八一頁〜八二頁、(一九七八年五月、萬葉堂出版)
 - ⑨ 山田昭夫『有島武郎』、八〇頁、(一九六六年一月、明治書院)
 - ⑩ 有島武郎研究会編『有島武郎事典』一三七頁(二〇一〇年一月、勉誠出版)
 - ⑪ 『有島武郎全集』第一卷(一九二四年四月、叢文閣) 小泉鐵「巻末に」
 - ⑫ 底本について、最新の全集である筑摩書房版の解題では、「有島武郎著作集」に収録されていなかった作品は、初収刊本、初出誌紙等をもって底本とした」とされている。「燕と王子」は『有島武郎著作集』全一六輯(一九一七年一〇月〜一九三三年一月、新潮社、叢文閣)には収録されていないため、底本は初出誌紙である。しかし筑摩書房版でも、初出は『婦人の国』と定める。叢文閣版を初出とする事実と矛盾するが、筑摩書房版の底本は『婦人の国』で間違いないだろう。
 - ⑬ Maenoに該当する人物について、有島の周辺人物や当時の画家を調査したが、現時点では判明していない。
 - ⑭ 明治四二年頃の山本直正の年齢は正確に分からない。有島の妹愛が結婚したのは明治三〇年、三男直忠が生まれたのが明治三七年である。直正は長男であるため、明治三〇年から明治三五年の間に生まれたと推測

する。直正自身が小学校に上がりたての頃に贈られた作品と述べるが、有島が執筆した明治四一年は小学校に上がりたての年齢からは少しずれている可能性がある。小学校に上がりたてに贈られたという直正の記憶も、誤りかもしれない。

⑮ HIGH above the city, on a tall column, stood the statue of the Happy Prince.

⑯ “When I was alive and had a human heart,” answered the statue. “I did not know what tears were, for I lived in the Palace of Sans-Souci, where sorrow is not allowed to enter. (中略) Round the garden ran a very lofty wall, but I never cared to ask what lay beyond it. (中略) My courtiers called me the Happy Prince, and happy indeed I was, if pleasure be happiness. So I lived, and so I died. And now that I am dead they have set me up here so high that I can see all the ugliness and all the misery of my city, and though my heart is made of lead yet I cannot choose but weep.”

⑰ 安藤聡『ファンタジーと歴史的危機——英国児童文学の黄金時代』(二〇〇三年一月、彩流社)によると、一九世紀後半はイギリス児童文学の黄金時代で、ファンタジーはその時代の社会情勢、特に「歴史的危機」と密接に結びついており、社会の変動に伴う「不安、悲観主義、内省逃避あるいは現実批判」が理由として挙げられる。「幸福な王子」もその一つとして含まれるならば、ワイルドも急速に成長する社会の中で蝕む貧富の差を批判しているのではないだろうか。

⑱ 「皇子と燕」では当部分(⑲)における「only not quite so useful」を「そればかりか、大変と必要なものだ」と訳している。論者はこの訳を誤りであると考え、寧ろ逆の意味で「尤も(風見鶏ほど)役に立たないもの」として訳したい。こちらの方が、像をただ美しいと褒めてはか

りて非実用的だと人々から思われることを恐れ、言い足した内容として適切であると考ええる。

⑲ “He is as beautiful as a weathercock,” remarked one of the Town Councillors who wished to gain a reputation for having artistic tastes: “only not quite so useful,” he added, fearing lest people should think him unpractical, which he really was not.

⑳ “Why can’t you be like the Happy Prince?” asked a sensible mother of her little boy who was crying for the moon. “The Happy Prince never dreams of crying for anything.”

㉑ “I am glad there is some one in the world who is quite happy,” muttered a disappointed man as he gazed at the wonderful statue.

㉒ “He looks just like an angel,” said the Charity Children as they came out of the cathedral in their bright scarlet cloaks, and their clean white pinafores.

“How do you know?” said the Mathematical Master; “you have never seen one.”

“Ah! but we have, in our dreams,” answered the children; and the Mathematical Master frowned and looked very severe, for he did not approve of children dreaming.

〔付記〕 本稿における有島武郎の文章は『有島武郎全集』全一六卷(一九八〇年八月)一九八八年六月、筑摩書房)を底本とする。引用に際して、旧漢字は新漢字に改め、傍線や傍点、ふりがなは適宜省略した。